

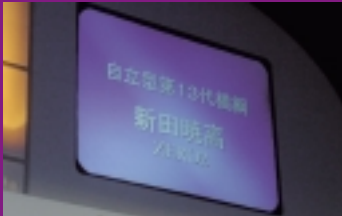
第13回

ついに高校生が両部門を制覇！ 全日本ロボット相撲大会レポート

あさの じゅんや
浅野 純也(ライター) junya@sepia.och.ne.jp



会場に用意された巨大な組み合わせ表。左の階段からその大きさがわかる。このトーナメントを勝ち上がらなければ横綱にはなれない。



優勝するとその頂点に横綱として表示される。



総エントリーが 4000を突破！

昨年の12月23日、東京の両国国技館において「第13回全日本ロボット相撲大会」が開催された。すでに年末のロボコンイベントとしておなじみのこの大会は、'90年、ソフトウェア開発を手掛ける富士ソフトABCが「ロボット作りという技術研究の目標を作ることで研究意欲の向上と創造

性発揮の場を提供する」を目標に始めたもの。その後ロボコン競技としてすっかり定着し、今回で13回目を迎えた。

今回も微増ながら総エントリー数は増えており、先に行われた高校生大会も含めると総計4000を突破。日本一の規模を誇るロボコンの地位を守っている。全日本の部では自立型で1347台、ラジコン型で1215台が参加、9月から始まった地区予選を勝ち抜いた自立型とラジコン型それぞれ64台ずつが日本一を目指した。

土俵が鉄板に変更

改めて説明するまでもないだろうがルールは単純。相手を土俵から押し出すせばOKという文字どおりのロボット相撲だ。そのため押し出すことと同様に、押し出されないことも重要として低重心化を図るのは定石。さらに進めてボディ下の空気を吸い出すバキューム式や、磁石を使ってに土俵に吸い付く方法が編み出されており、今

常連の横須賀ロボットクラブも一回戦で敗退。相手は準優勝の百花繚乱だった。



審判の名裁きぶりもこの大会の特徴。大きなジェスチャーはおなじみのものだ。



試合の合間に急いで修復。ロボットの先端に貼るシートを慎重に取り付けているところ。



会場には4つの土俵が並べられた。大モニターが数基用意され、会場のどこからでも試合の様子が見える。